

贈東林總長老

元豊七年四十九歳（一〇八四年四月）廬山にて作る。

東林の総長老に贈る

溪聲便是廣長舌

溪聲すなわ便こちうはちはら長し舌ぜつ

山色豈非清淨身

山色あに豈あ清き淨じ身しんにあらずや

夜來八萬四千偈

夜來八萬四千偈

他日如何舉似人

他日いかん如何いぞか人に舉こ似じせん

【語釈】○東林：東林寺。廬山の南麓に西林寺と並んである。晋の沙門慧遠が三六六年開いた名刹。はじめ律宗の寺でのち禪寺となる。○総長老：長老は高德の老僧をいう。常総は元豊三年に東林禪寺第一代の祖師となり、元祐四年（一〇八九）に照覚大師の号を賜る。この詩は常総に贈られたもの。○広長舌：仏世尊の舌は広く長く面上を覆い、髪のはえぎわまでとどいたという。釈尊説法の声にいう。なお、ながながとしゃべることを長広舌ということもある。○清淨身：仏教で一切の悪業から遠ざかり、煩惱の垢染から離れることを清淨という。法華經の神力品その他にみえる語。○八万四千：法華經・楞嚴經など仏典に多くみえる数。極めて多いことの形容。觀無量壽經に「無量壽仏、有八万四千相」。○偈：梵語 G a t h a の音訳。偈佉。仏典にみえる一句五字または七字の韻文で、多く四句を一偈とする仏典中の韻文。法義を述べ仏徳を讃える。○如何：どのようにするかという方法についての疑問。文調によって反語の語気となり、どのようにしてするのか!? できることではない! ということを示す。○挙似：他人に示し告げること。挙はものを手にもって高くあげる動作。似は助辞。臨濟録など、それ以降の禪家の書に習見する語。この作品には東坡の仏教者としての禪の悟りの境地があらわれていよう。

【通釈】ここ廬山の溪谷を流れる水の音は、そのままに釈尊説法のみ声であり、廬山の山容はなんと仏菩薩の清淨のおん身に他ならないではないか。昨夜来八万四千の偈を一挙に悟ったが、この三昧の境地は後日、人に説明してあげることの出来るものではない。

蘇東坡 近藤光男 蘇東坡一〇〇選石川忠久 より抄出